

土器を構築材とする造り付けカマドの基礎的検討 -埼玉県域を中心に-

メタデータ	言語: 出版者: 明治大学文学部考古学研究室 公開日: 2023-08-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本,康太郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000061

研究ノート

土器を構築材とする造り付けカマドの基礎的検討

—埼玉県域を中心に—

松本 康太郎

要旨

カマドの研究は多岐にわたるが構築材への着目はまれで、特に土器を構築材とする造り付けカマドは定量分析が存在しない。ここでは使用される土器と遺構としてのカマドを総合的に検討する足掛かりとして、埼玉県域内の該当する遺構を集成して分析および基本的な事実の確認を行った。

その結果、土器を構築材とする造り付けカマドは対象地域内において、検出量に時間的・空間的偏りが存在することが明らかとなり、基本的にはこの地域で製作・使用された土師器が使用され、須恵器は使用されることが判明した。またその配置から焚口を重要視する可能性が高いと推測できた。さらに当該遺構を持つ建物跡と、持たない建物跡の差が、少なくとも建物面積に現れることも指摘できた。

この分析結果から、埼玉県域においては①土器を構築材とする造り付けカマドは5世紀に出現し、7世紀に特徴的な遺構である、②より入手しやすい土器を構築材として使用した、③焚口に配置するのは補強以外に給気口面積の確保が考えられる、④当該遺構を持つ建物は、その時期の平均面積以上の面積を持つことが明らかとなり、その理由としてカマド補強という観点から、建物における食事を供する人が多いほど建物の専有面積が必要で、かつカマドの使用頻度多いためと考えられる、などの考察を加えた。

キーワード：埼玉県域 構築材 土師器 カマド 古墳時代後期から平安時代

はじめに

遺構としてのカマドは、古墳時代後期以来広く集落遺跡でみられる、鍋を掛けて煮たり蒸したりするドーム形の調理施設である。カマドには土製の置きカマドと、建物の一辺に付設される造り付けカマドの2種類が存在する。そのうち、造り付けカマドの研究は出現や変遷、祭祀、燃烧構造などの面で様々な成果が蓄積されており、近年は甕のスコグ分析などと組み合わせ、当時の食材調理方法の復元、さらにはその東西差の解明に迫った研究もみられる。一方で、造り付けカマドには粘土や砂、石材、土器、瓦等多様な構築材が使用されるが、それらに着眼した研究は未だ少ない。その原因のひとつとして考えられるのが、造り付けカマドは壊れるのではなく人の手によって意図的に壊されるものであり（中沢 1986、堤 1991・1995）、検出状況が純粋な使用状態を示さないという点である。しかし、ある程度構築材が残ったカマドも一定数検出されるようになり、まとまった範囲内の定量分析は有効と筆者は考えている。本稿では『発掘調査のてびき』でも重要な遺構として示されている、土器を構築材とする造り付けカマド（図1）に着目して基礎的な分析を行い、遺構としてのカマドと使用される土

器を総合的に分析する足掛かりとしたい。なお、以下では当該遺構について「造り付け」の表記を省略する。

I. 研究史

カマド構築材全般への着目も含め土器を構築材とするカマドに関して、管見で触れる限りは定量分析は存在しない。以下ではこれらの遺構への記述を基に現在の認識について確認する。

カマド構築材に関する言及は古く、1955年刊行の新宿区落合遺跡の発掘調査報告書内の大川清による記述がその端緒である。大川はカマドの構築材について、①粘

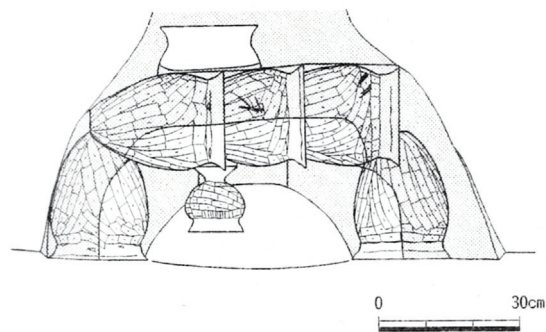


図1. 『発掘調査のてびき』掲載の土器を構築材とするカマド（文化庁文化財部記念物課（編）2010）

土製、②石芯粘土製、③石組み、④土器芯粘土製、⑤瓦組みの5つに整理し、構築材の使用は粘土による構造の欠陥を補うもの、すなわち補強を目的としていると推測した(大川1955)。また粘土製が一番古いとしながらも、構築材の使用は時期差ではなく地域差であり、身近にあるものを使用したに過ぎないと考えた。大川のこの記述は、カマド構築材に関して基本的な視点を提示したものとして評価できる。

外山政子は群馬県長根羽田倉遺跡・三ツ寺Ⅱ遺跡の古墳時代のカマドについて、構築材として使用される土器とそこに付着する外面のスス痕や内面のコゲ痕を詳細に観察し、それらの土器が一度調理に使用されたのちカマド構築材に転用されることを突き止めた(外山1991・1992)。その後、原智之は土器を含むカマドの構築材の使用について、①加工に労力を要さないもの、②建物内に必ず存在するものを条件に挙げ、構築材の使用目的として、カマド高さの維持と補強が主なものだと考えた(原2001)。さらにこれらの構築材を使用するカマドは検出数が多くないことを踏まえて、「頑丈なものを末永く」的な考えに基づいた「高級竈」と位置付けた。加藤隆則は埼玉県加須市飯積遺跡の報告書内において構築材が使用される箇所を集計したところ、カマドの先端、すなわち焚口に使用する例が一番多いことを明らかにし、焚口に利用する理由として焚口幅の決定と推測した(加藤2007)。このほか、福島県本宮市高木遺跡(北野ほか2008)、新潟県聖籠町山三賀Ⅱ遺跡(滝沢2009)、京都府京都市西京極遺跡(柏田2017)において土器を構築材とするカマドの事例が挙げられており、土器はいずれも一度調理に使用後、転用されているという。特に柏田有香は、西京極遺跡における6世紀前葉から中葉と推測される土器を構築材とするカマドの存在について、カマド導入から1世紀あまり経て構築技術が一定の到達点に達した段階のものとして評価している(柏田2017)。

近年は小林正史が、掛ける甕の個数との関連でカマドの構築材について言及しており、東国に甕や石などを構築材として使用する例が多い理由として、甕を2個掛けることで燃焼室内に隙間が無くなり、側壁に圧力がかかることでそこを補強する必要が生じるためと推測している(小林2018)。

以上、土器を含めたカマド構築材に関する認識を概説したが、おおむね以下にまとめられる。すなわち、①土器を構築材とするカマドは東北地方南部・北陸を東限、畿内を西限とするかなり広い範囲にわたって見られる、②構築材に使用される土器は一度調理工程を経て転用されている、③カマドの高さや焚口幅の確保、側壁の補強など様々な理由が考えられている、④土器も含め構築材は身近にあるものを選択している、の4点である。一方

で、これらの認識が定量分析から得られたものではないため、上記②～④に関しては定量分析を行い再検討する余地があるだろう。また、現在まで言及のなかった出現や変遷、空間的分布など基礎的な事実確認も課題として設定する。

Ⅱ. 分析対象と方法

分析対象遺構は、土器を燃焼室範囲(袖・天井部)に使用したカマドである(図2)。煙道を土器で構築するカマドについては、検出量が極めて少ないため今回は対象から除いた。対象地域は現在の埼玉県域で、対象の遺跡は古墳時代後期～平安時代の集落遺跡78か所、遺構数は326基である(図3)。

分析は、土器編年を基礎とした(1)時期による検出量変化と¹⁾遺跡位置による空間分布の把握、(2)土器配置の類型化と傾向、(3)使用する土器の種類、(4)土器を構築材とするカマドの有無の比較の4つである。

Ⅲ. 分析

(1) 時期による検出量変化と遺跡位置による空間分布の把握

各遺跡の報告などを基に、検出した326基のカマドを持つ建物をI期(5世紀後半)～X期(10世紀以降)に再構成し、数量の推移を示したのが図4である(図4)。これによると、土器を構築材とするカマドは埼玉県域においてI期(5世紀後半)に出現し、徐々に検出量が増加する。V期(7世紀後半)になると数量はピークに達し、VI期(8世紀前半)以降、その数を減らしながらX期(10世紀以降)まで継続する。

この時期別の推移を分布と組み合わせ示したのが図5である(図5)。先に示した図3において、分布が県の北西部域に固まることが明らかであるが、さらにそれを時期別にみると、すべての時期において北西部域で検出されており、時期的にも安定して検出される範囲であることが分かる。

I期(5世紀後半)は深谷市の城北遺跡、柳町遺跡、川端遺跡で検出されており(図6上段)、II期(6世紀前半)以降、北西部域を中心にその分布範囲を拡大してゆく。分布範囲が最大広域化するのはIV期(7世紀前半)で、埼玉県のほぼ全域において検出されるようになる。VII期(8世紀後半)までは比較的広範囲で検出されるが、その後は検出量の減少と共に再び県の北西部域に収束し、X期(10世紀以降)に深谷市大寄遺跡、本庄市大久保山遺跡の検出をもってその終焉を迎える(図6下段)。

以上の分析から土器を構築材とするカマドは、当該地域において時間的、空間的にみて広く見積もっても7世

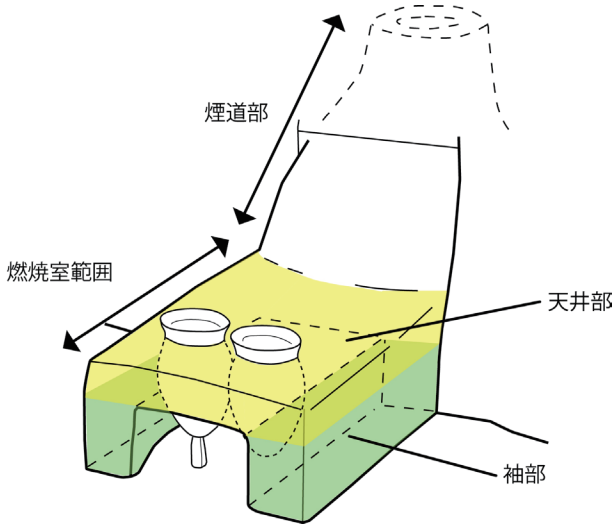


図2. カマドの構造と名称 (外山 2018 を改変し作成)

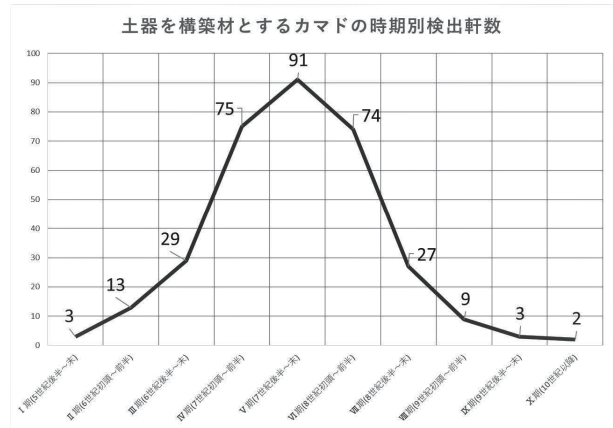
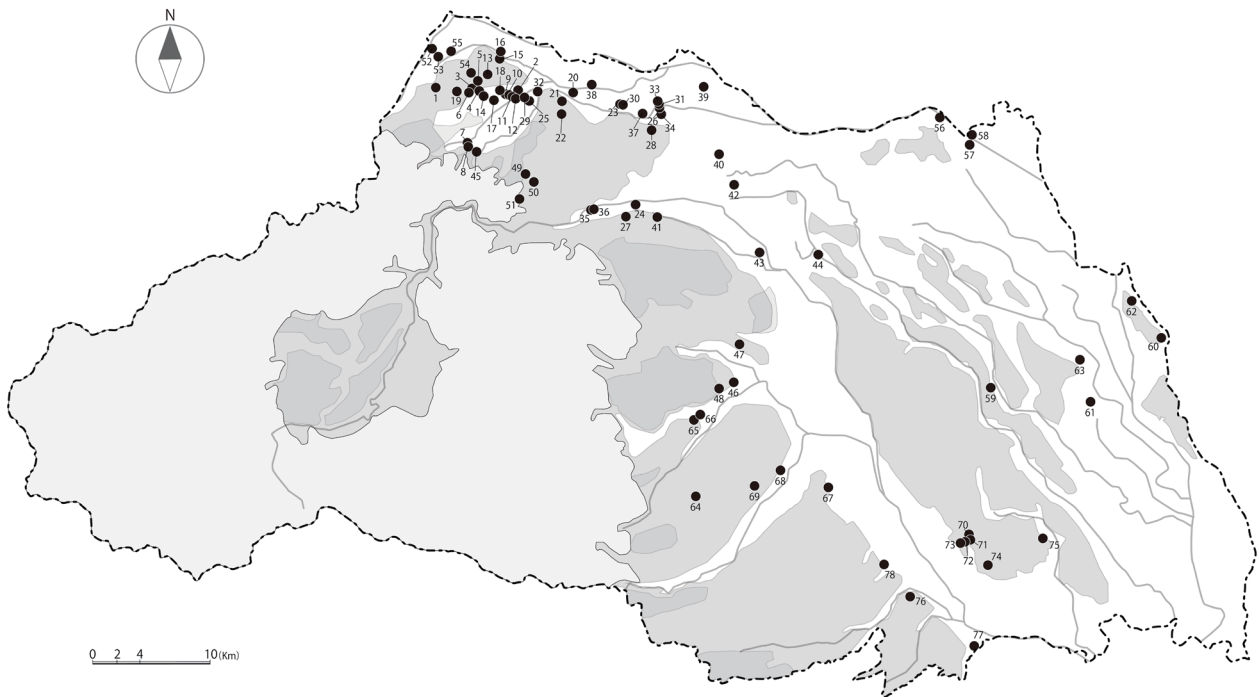


図4. 土器を構築材とするカマドの時期別の数量変遷



- | | | | | | |
|---------------|-----------------|------------|------------|--------------|----------|
| 1. 皂樹原遺跡・檜下遺跡 | 16. 小島本伝遺跡 | 31. 城北遺跡 | 46. 大西遺跡 | 61. 浜川戸遺跡 | 76. 城山遺跡 |
| 2. 社具路遺跡 | 17. 大久保山遺跡 | 32. 六反田遺跡 | 47. 籠田遺跡 | 62. 横野地北遺跡 | 77. 吹上遺跡 |
| 3. 今井屋敷裏遺跡 | 18. 七色塚遺跡 | 33. 柳町遺跡 | 48. 大塚原遺跡 | 63. 道仏遺跡 | 78. 宮脇遺跡 |
| 4. 今井川越田遺跡 | 19. 将監塚遺跡・古井戸遺跡 | 34. 清水上遺跡 | 49. 堀込遺跡 | 64. 王神遺跡 | |
| 5. 地神遺跡 | 20. 樋詰遺跡・砂田前遺跡 | 35. 如意遺跡 | 50. 出羽塚遺跡 | 65. 稲荷前遺跡 | |
| 6. 今井遺跡 | 21. 熊野遺跡 | 36. 川端遺跡 | 51. 金嶽遺跡 | 66. 金井遺跡 | |
| 7. 秋山諏訪平遺跡 | 22. 北原遺跡 | 37. 宮ヶ谷戸遺跡 | 52. 東猿見堂遺跡 | 67. 小仙波4丁目遺跡 | |
| 8. 秋山大町遺跡 | 23. 上敷免遺跡 | 38. 雷電遺跡 | 53. 臺遺跡 | 68. 霞ヶ関遺跡 | |
| 9. 北堀久下北遺跡 | 24. 鹿島平方裏遺跡 | 39. 池ノ上遺跡 | 54. 下廊遺跡 | 69. 上組遺跡 | |
| 10. 久下東遺跡 | 25. 宮西遺跡 | 40. 北島遺跡 | 55. 若宮台遺跡 | 70. 小井戸遺跡 | |
| 11. 久下前遺跡 | 26. 前遺跡・居立遺跡 | 41. 宮下遺跡 | 56. 屋敷裏遺跡 | 71. 札ノ辻遺跡 | |
| 12. 北堀新田前遺跡 | 27. 権現堂北遺跡 | 42. 前中西遺跡 | 57. 宮東遺跡 | 72. 札ノ辻3号遺跡 | |
| 13. 夏目西遺跡 | 28. 下郷遺跡 | 43. 下田町遺跡 | 58. 飯積遺跡 | 73. 今宮2号遺跡 | |
| 14. 川越田遺跡 | 29. 大寄遺跡 | 44. 築道下遺跡 | 59. 荒川附遺跡 | 74. 別所子野上遺跡 | |
| 15. 小島仕切沢遺跡 | 30. 新屋敷東遺跡 | 45. 広木上宿遺跡 | 60. 貝の内遺跡 | 75. 水深遺跡 | |

図3. 分析対象遺跡

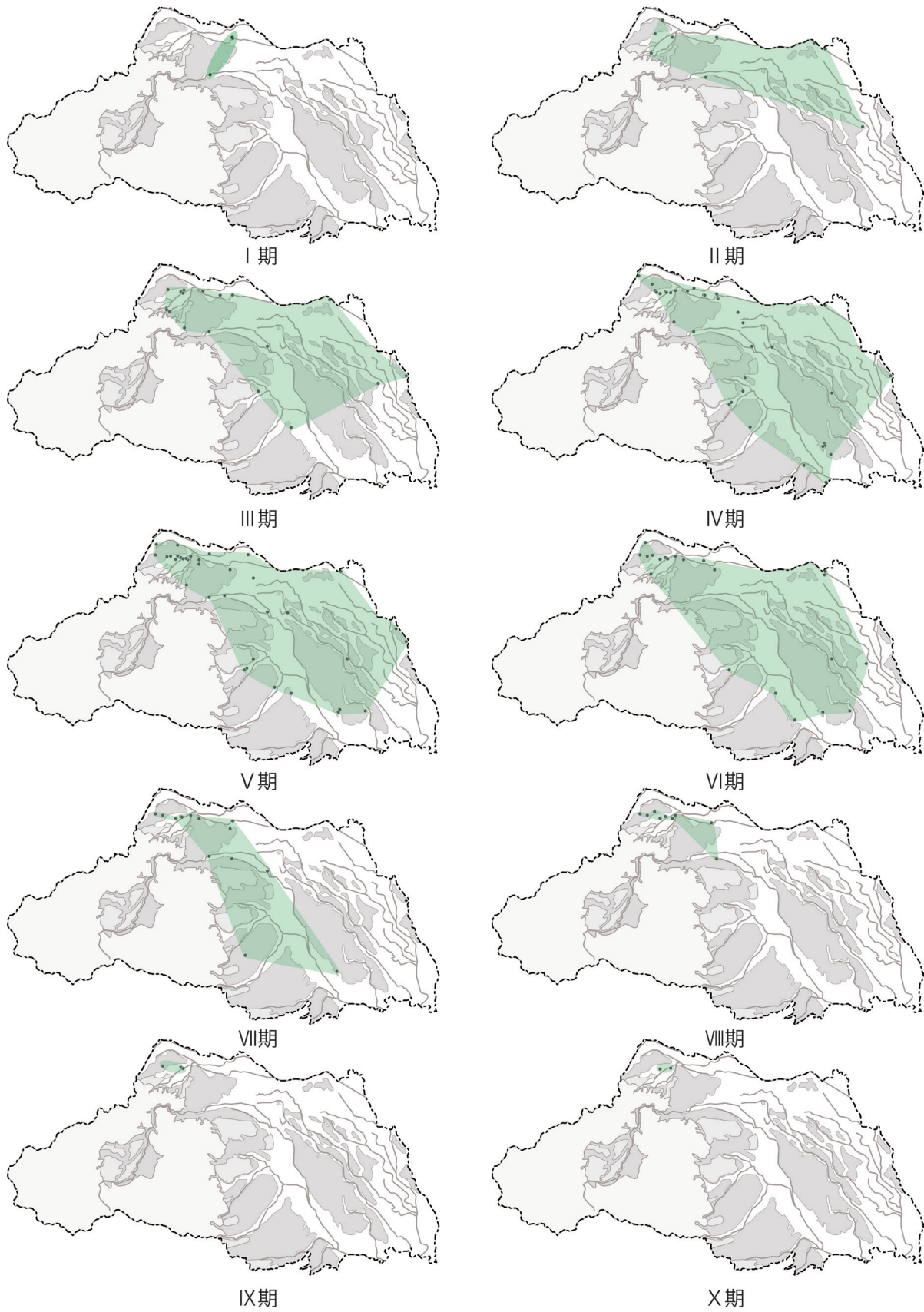
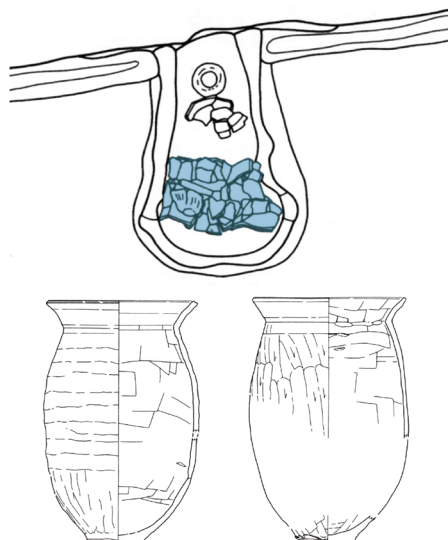


図5. 各時期ごとの検出遺跡位置

I期(5世紀後半)のカマド

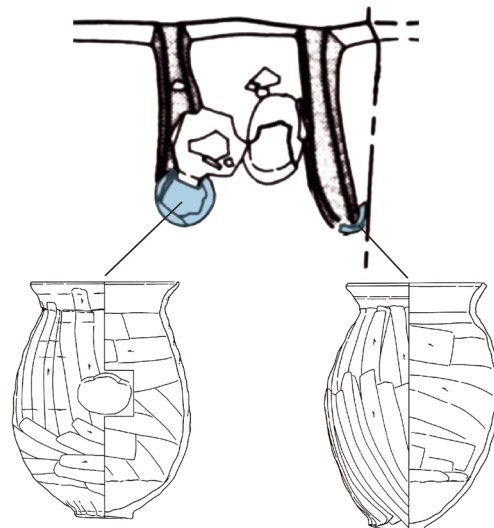
柳町遺跡

26号建物跡



城北遺跡

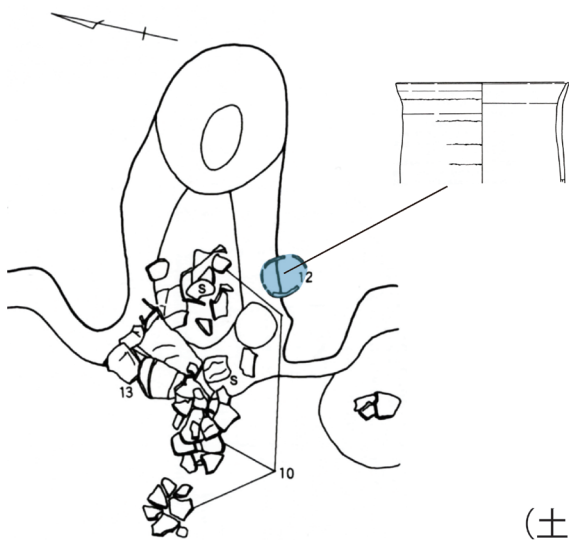
52号建物跡



X期(10世紀以降)のカマド

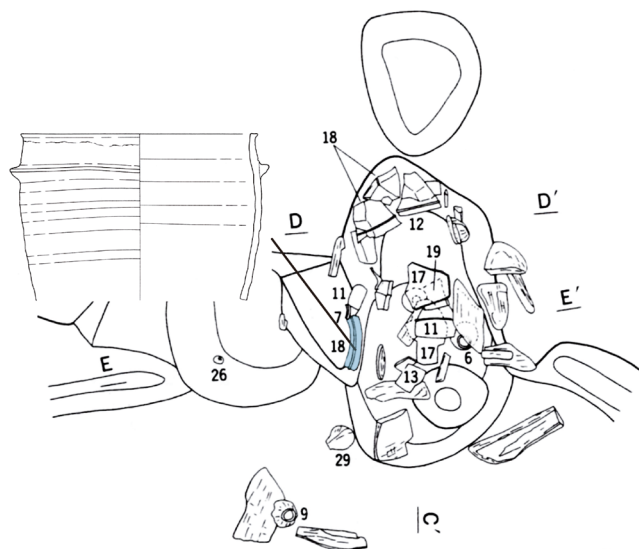
大寄遺跡II

225号建物跡



大久保山遺跡

65号建物跡



(土器)

0 10cm

(カマド)

0 1m

図6. I期とX期の土器を構築材とするカマド(各報告書による)

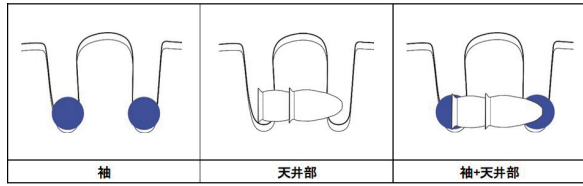


図7. 主な検出遺跡位置と数量

片袖 (片側)			
A類 片袖の先端	B類 片袖の内部	C類 片袖(先端+内部)	D類 壁面とカマド開口込みの交点(片側)
両袖 (両側)			
E類 両袖の先端	F類 両袖の内部	G類 袖先端と内部(3個以上使用)	H類 壁面とカマド開口込みの交点
I類 両袖先端+片袖内部	J類 片袖先端+両袖内部	K類 片方は袖先端、片方は袖内部	

図8. カマド袖からの土器の検出位置と類型

表1. 各類型の時期別検出数量表

時期	類型											計
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	
I期(5世紀後半)	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2
II期(6世紀前半)	4	1	0	0	7	0	0	0	0	0	0	12
III期(6世紀後半)	8	0	1	0	14	1	2	0	1	1	0	28
IV期(7世紀前半)	17	6	0	2	31	3	6	1	2	1	1	70
V期(7世紀後半)	24	11	0	2	35	8	1	3	1	0	2	87
VI期(8世紀前半)	17	4	0	3	24	13	2	5	0	0	0	68
VII期(8世紀後半)	2	4	0	2	2	3	0	6	0	0	1	20
VIII期(9世紀前半)	2	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	5
IX期(9世紀後半)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
X期(10世紀以降)	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
計	74	30	1	9	114	28	11	17	4	2	4	294

紀に特徴的な遺構といえる。

(2) 土器配置の類型化とその特徴

土器の検出位置は大きく①袖、②天井部、③袖+天井部の3つに分類できる(図7)。そのうち袖からの検出例は①と③を合計した294基であり、全体の90%に当たる。ここから、現状検出数の多い袖からの検出例を類型化し、その時間的な在り方を確認する。

袖からの検出状態を図8のとおり11の類型に分類した(図8)。ただし類型A~Dは片袖のみの検出ではあ

るが、本来両袖に土器を配置していた可能性は否定できないので、注意が必要である。

特徴のある類型について記述すると、袖における土器の配置の仕方はカマドによって多種多様であるが、類型ごとの最大検出数を誇るのは両袖の先端に配置する類型Eであり、8世紀後半まで安定して見られた(表1)。また片袖の先端に配置する類型Aが次いで、6世紀から9世紀まで認められた。このように袖の先端から検出される例は、類型B・Fを除く294基のうち236基であり、構築材配置の位置として当時の人びとが袖の先端を重視していたと考えられる。

次にあげられるのは類型Gで、両袖の先端と内部にそれぞれ土器を配置する。最低でも構築材として土器を4点使用していることが特徴である。このように土器を多量に構築材として使用する類型Gが、6世紀~7世紀にかけて一定数検出されており、1基あたりの土器の使用個数と検出軒数は関係しないことが明らかである。

反対に類型Kのような片袖は先端、片袖は内部に土器を配置する例は極めて少ないことも特徴の一つとして挙げることができる。これらの配置類型か全体を通覧して、土器がカマドの中央軸と直行するよう配置されている例が多く(具体的には類型A~D、Kを除く176基)、ここから袖であればどこに土器を配置してもいいというわけではなく、土器を配置することで得られる効果を当時の人が把握していることが窺えよう。

(3) 使用する土器の種類

カマドの構築材として使用する土器についても、器種や種類に偏りがあるのかを検討した(図9左上)。結論として、カマドの構築材として使用される土器は、長胴甕とその系譜上に位置する武蔵型甕が大半を占めることが明らかとなった。当該地域において古墳時代後期から平安時代にかけて多量に出土するため、この結果は当然といえる。検出遺構としては326基の内264基が長胴甕ないしは武蔵型甕のみで構成するカマドで、その他、春日部市貝の内遺跡においては常陸型甕が使用される例がある(図9右上)。その他の土器を使用する残りの62基についても、使用する土器の一部に長胴甕・武蔵型甕が含まれるものもあるため、実際に長胴甕や武蔵型甕を使用するカマドはさらに多い。

また、この分析の特徴的な結果の一つに、甕を構築材に使用するカマドが存在することが挙げられる。数は少ないものの、実見したものの中には、ほぼ完形で構築材として使用されている例も存在した(図9左下)。このことは構築材として使用する土器は甕に限らず、甕に準ずるサイズを持つものであれば利用されることを示している。その一方で、須恵器の壺や甕をカマドの構築材と

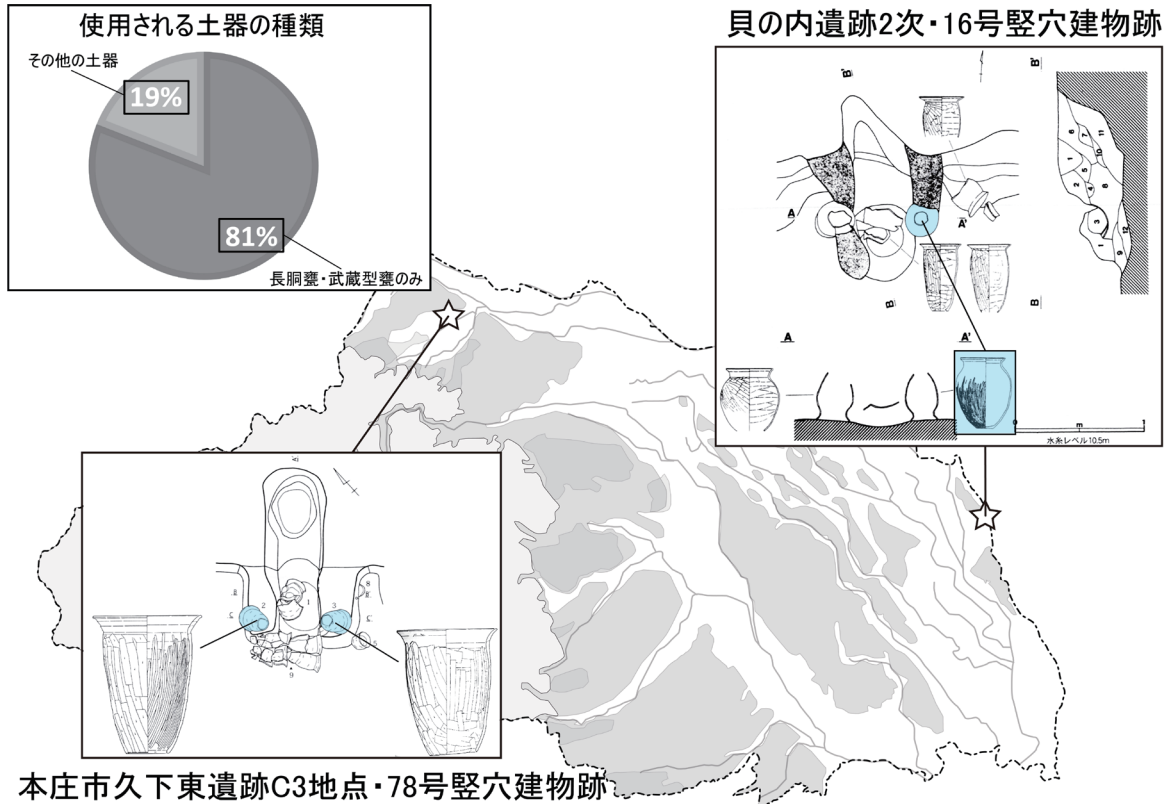


図9. 検出される土器の種類と遺跡の位置（土器、カマドは各報告書による）

して袖の先端や内部に立てる例は全く見られなかった。当時の人びとが、須恵器をこのような使用の仕方として選択しなかったことが窺える。

(4) 土器を構築材とするカマドの有無の比較—建物面積の検討から—

前述のとおり、土器を構築材とするカマドは確認できただけで326基あり、当該地域の古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴建物数に比して、その検出数は圧倒的に少ない。もちろん、最初に述べたようにカマドは使用終了時に意図的に破壊される例が多いため、土器を構築材としたカマドの実数は検出数より多いことが予想されるが、それでも通常の粘土や地山で構築するカマドと比較すれば、その使用数は少ないと考えられる。

ところで、カマドに構築材として土器を使用する理由は、「堅牢なカマドを作る」（原 2001 ほか）、「補強する」などが考えられている。もしこうしたカマドが「補強」の意味を持つならば、カマドを補強する建物、補強しない（＝粘土や地山などで作る）建物で何かしらの差が出るはずと考えた。そこで着目したのが建物の床面積である。

分析としてはまず、辺の長さが分かる竪穴建物跡を任意の遺跡16か所から抽出し（n=1590）、I～X期ごとの建物跡の面積の平均値を算出した（図10・表2）。次に、

土器を構築材とするカマドを持つ建物跡の面積の平均値を算出し、その差を比較した（図11）。なお、土器を構築材とするカマドを持つ建物で建物面積が判明したものは326軒のうち263軒であり（表2）、時期によってはサンプル数が極端に少ない場合もある。面積の比較分析の結果、古墳時代後期において、当該カマドを持つ建物ほどの時期においても平均より広い傾向が顕著で、奈良時代以降についてもこの時期の平均の数値とほぼ同じかやや広いという結果になった。分析数が少なく、一般的な傾向とするためには資料の増加を期待したいが、結果としてもある程度の妥当性は担保できると考えられる。

IV. 考察

以上の分析結果をまとめると、①埼玉県域において北西部域が分布の中心であり、IV期（7世紀前半）に分布が最大広域化する。②I期（5世紀後半）からX期（10世紀以降）まで検出が確認され、そのピークはV期（7世紀後半）である、③袖における土器の配置は先端（焚口）が多い、④使用される土器は長胴甕や武蔵型甕を中心とする、⑤土器を構築材とするカマドを持つ建物は各時期の平均よりも面積が大きい傾向にある、の5つに集約される。

この結果を基に、いくつか考察を加える。まず出現時

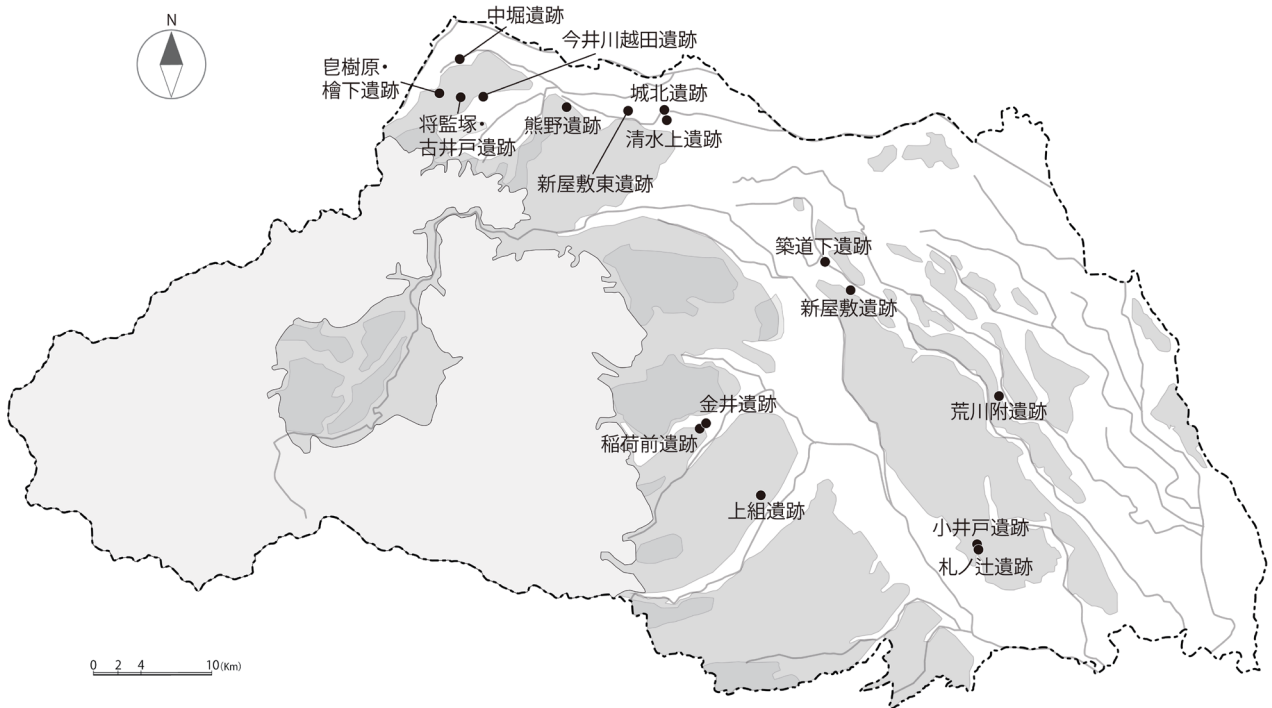


図 10. 建物面積を分析した遺跡とその位置

期に関してであるが、土器を構築材とするカマドが埼玉
 県域において5世紀後半に出現するという事は、少
 なくとも当地域において西京極遺跡の事例において指
 摘された、構築技術が一定の到達点に達した段階のカマド
 (柏田 2017) という認識は当たらないと考えられる。む
 しろカマド導入とさほど時間差なく現れると推察される
 のだ。これを傍証する一例として、隣接する群馬県渋川
 市金井東裏遺跡において検出されたカマドが挙げられる
 (図 12)。この遺跡は甲冑を着た古墳時代の人骨が出土
 し著名となったが、発掘調査において30軒を超える竪
 穴建物が検出されており、その中でも72号建物跡の土
 器を構築材とするカマドが注目される。この建物跡の時
 期は出土土器から5世紀中葉に遡る可能性が指摘され
 ている(杉山ほか 2019)、さらに当遺跡におけるカマドの
 出現期でもある点は特筆されよう。このことから土器を
 構築材とするカマドの出現は、カマド導入とほぼ時間差
 がなく、すでに当時の人がこれらのカマドの存在と構築
 方法を熟知していたことが窺える。また当該カマドは土
 器の配置から図8で示した類型GまたはJと推測され、
 出現に近い時期において、土器を3個体以上使用する例
 が見られることも、これらのカマドの特徴として明記し
 ておきたい。

次に土器の検出位置に関してであるが、その多くが袖
 の先端、すなわち焚口に配置することが明らかになっ
 た。焚口に配置する理由として、構築土の流出防止(加
 藤 2007)などの補強的側面のほか、高さの維持(原

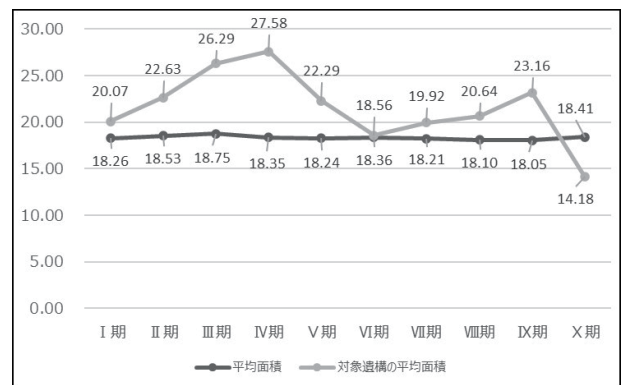


図 11. 各時期の竪穴建物の平均面積と土器を構築材とするカマドを持つ住居面積の比較グラフ

表 2. 建物面積の分析対象数

	I期	II期	III期	IV期	V期	VI期	VII期	VIII期	IX期	X期	合計
埼玉県全域	51	111	144	233	233	248	131	99	207	133	1590
対象遺構	2	11	22	64	67	63	23	7	2	2	263

2001)、幅の確定(加藤 2007)が考えられている。換言
 すれば、単にカマド補強だけがこれらの構築材使用の理
 由にならない。焚口高さの維持や幅の確定から考えられ
 ることは給気口の面積の確保であり、酸素の安定供給と
 それによる安定的な火力を求めたことで、これらの構築
 材を使用したと考えることができる。このように構築材
 使用に関しては、カマドの補強以外の側面も評価すべ
 きであろう。

一方で、土器を構築材とするカマドの有無と建物面積

の相関は、上に挙げた給気口面積確保のみならず、やはりカマドの補強という側面も強く関わると考えられる。現状では、土器を構築材とするカマドを持つ建物は、時期別にみてもその平均よりも大きい傾向にある。これはおそらくカマド使用頻度と関わると考えられ、同一建物内において食事を供する人が多いほど建物の占有面積が必要であり、かつカマドの使用頻度が多くなりより耐久

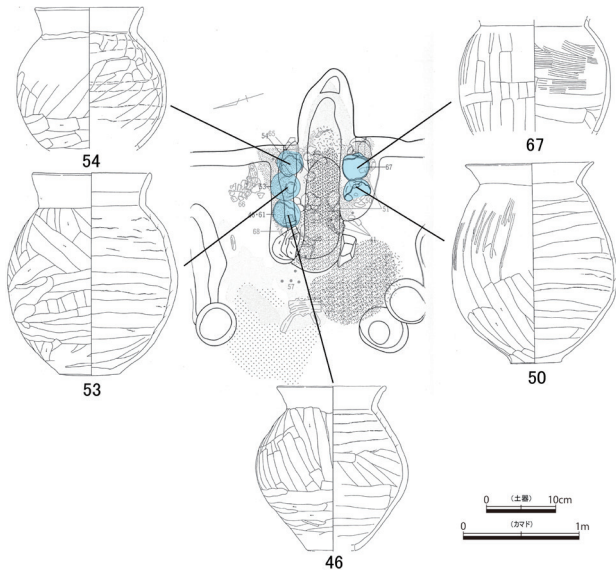


図 12. 金井東裏遺跡 72 号竪穴建物跡カマドと土器（杉山ほか 2019 を改変）

力が必要であったと推測する。

最後に、使用される土器について考えてみたい。先述のとおり使用される土器については当該地においてよくみられる長胴甕や武蔵型甕が使用される傾向が強いが、実は土器を構築材とするカマドの分布の中心域と武蔵型甕の分布の中心域と範囲が重なる（図 13）。桜岡正信によれば、この武蔵型甕の分布の中心域が武蔵型甕の生産地であるという（桜岡 2003）。このことから、これらの甕の生産の中心と土器を構築材とするカマドの分布中心域が重なるということは、使用する土器はあくまでも恒常的に入手可能なものであると言える（大川 1955、原 2001）。その反面、甕や長胴甕や武蔵型甕以外の甕類、例えばやや小型の甕や形態的に壺に近いものなどが使用される例も散見され、長胴甕や武蔵型甕のサイズに準じるものであればよく、その建物で生活を営んでいた者からすれば、長胴甕や武蔵型甕に限らず身近に存在する土器を使用したに過ぎない。

ただし、構築材に使用された土器は実見した限りでは完存するものや、ススやコゲが顕著に見られないもの、残りのいいものを意図的に打ち欠いて利用する例も一定数見られた。そのため、今まではカマドの構築材として使用される土器は調理工程を経たのち転用されたものと考えられてきたが、調理工程を経ないで構築材に使用されている可能性も考慮に入れる必要があるだろう。

おわりに

以上、土器を構築材とするカマドについて、時期・空間分布の分析や配置の傾向などを分析し、基礎的な事実とそれに伴う若干の考察を付け加えた。先述のとおり、これだけ分析をした資料も当該地域・当該時期のカマドの総数からするとごくわずかであり、構築材に土器を使用することは、カマド構築に際してのオプションのひとつに過ぎない。土器のみならずカマドの構築材は、周囲を取り巻く環境と人々の意識や知識によって選択されたのであり、そこから当時の人々の思考の一端が読み取れると考えている。今後の課題として、地域を広げて土器以外のカマドの構築材についても同様の分析を行い、地域を越えて同様の傾向が見られるのか、また食膳具と煮沸具である土師器の地域色とカマドの構築材の選択の仕方は相互に関連するか明らかにすること、そしてこの土器を構築材とするカマドの出現とカマドの伝播の関連性の検討、この 2 点を挙げ擱筆することとしたい。筆者の力不足ゆえ蒐集資料の見落としや分析の拙劣さは否定できず、また基礎分析以上の考察を加えることができなかった。諸賢のご叱正をお願いする次第である。

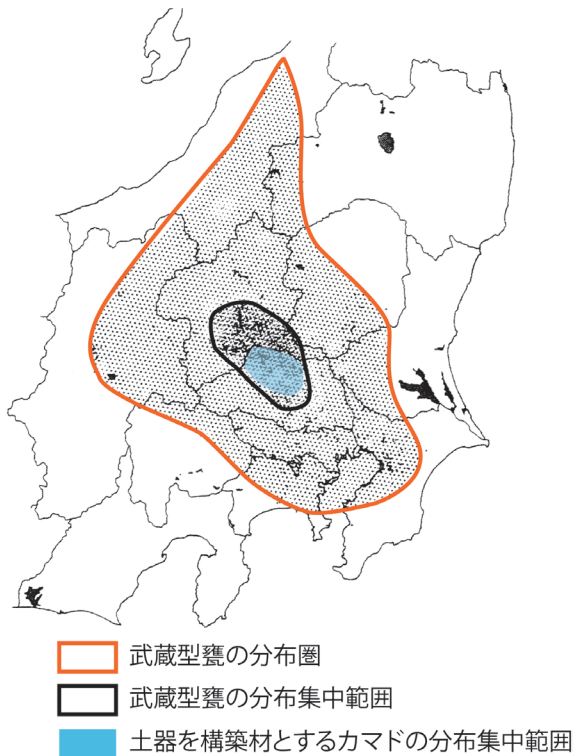


図 13. 武蔵型甕の分布範囲（桜岡 2003 に加筆）

本稿執筆にあたり、明治大学文学部考古学専攻の先生方にはご指導を賜り、明治大学大学院の方々には多くのご意見をいただいた。また、大学の同期である柏瀬拓巳からも貴重な意見をいただき、文章校正に関しては鎌田ゆりかの手を煩わせた。さらに資料実見に際して以下の諸機関よりご高配を賜った。末筆ながら記して御礼申し上げる。

熊谷市教育委員会、埼玉県教育委員会、埼玉県立さきたま史跡の博物館、深谷市教育委員会、本庄市教育委員会（50音順）

註

- 1) 時期比定については原則各遺跡の報告に準じつつ、須恵器や当該地域に分布が集中する有段口縁坏や比企型坏などの土師器坏（田中 1991、水口 1989）、土師器甕（桜岡 1991・2003）を参照した。また古墳時代後期前半は熊谷市下田町遺跡（赤熊・瀧瀬 2006）、蓮田市荒川附遺跡の土器編年（富田 2007）、古墳時代後期後半については、深谷市下郷遺跡、幡羅遺跡（知久 2012）の編年、奈良・平安時代の須恵器については、渡辺一の論考（渡辺 1990a,b）を参照した。
- 2) 使用した発掘調査報告書は紙数の都合上割愛した。

参考文献

- 赤熊浩一・瀧瀬芳之 2006「V 調査のまとめ」赤熊浩一・瀧瀬芳之（編）『下田町遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第319集 pp.492-499（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 大川清 1955「カマド小考」『落合』pp.81-86 早稲田大学考古学研究室
- 柏田有香 2017「古墳時代の土器転用カマド」『洛史 研究紀要』11号 pp.14-20（公財）京都市埋蔵文化財研究所
- 加藤隆則 2007「V 結語 1. 遺構と遺物の出土状況」鈴木孝之・岩瀬譲・加藤隆則（編）『飯積遺跡Ⅱ』（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第334集 pp.395-405（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 北野博司・三河風子・小此木真理 2008「東北地方南部における古代の土鍋調理」『東北芸術工科大学 歴史遺産研究』No.4 pp.1-26 東北芸術工科大学
- 小林正史 2018「総論 古墳時代・古代の米蒸し調理」『物質文化』98 pp.1-19 物質文化研究会
- 桜岡正信 1991「7世紀代以降の土師器坏の画期とその要因について」『群馬考古学手帳』Vol.2 pp.79-90 群馬土器観会
- 桜岡正信 2003「武蔵型甕について」『高崎市史研究』17号 pp.1-16 高崎市
- 杉井健 1993「竈の地域性とその背景」『考古学研究』第40巻第1号 pp.33-59 考古学研究会
- 杉山秀宏ほか 2019『金井東裏遺跡〈古墳時代編〉』（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第652集（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗 2009「聖籠町山三賀Ⅱ遺跡煮沸具の使用痕跡について」『新潟考古』20号 pp.129-148 新潟県考古学会
- 田中広明 1991「古墳時代後期の土器生産と集落への供給」『埼玉考古学論集』pp.635-663（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

- 知久裕昭 2012「V 出土遺物の検討」知久裕昭（編）『幡羅遺跡Ⅷ』pp.21-33 埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第127集 深谷市教育委員会
- 堤隆 1991「住居廃絶時における竈解体をめぐる」『東海史学』25号 pp.93-114 東海大学史学会
- 堤隆 1995「竈の廃棄プロセスとその意味」『山梨県考古学協会誌』第7号 pp.12-16 山梨県考古学協会
- 外山政子 1989「群馬県地域の土師器甕について」『研究紀要』6 pp.95-115（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 外山政子 1991「羽田倉遺跡の煮沸具の観察から」小野和之ほか（編）『長根羽田倉遺跡』（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第99集 pp.500-509（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 外山政子 1992a「三ツ寺Ⅱ遺跡のカマドと煮炊」森田秀策ほか（編）『三ツ寺Ⅱ遺跡』（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第93集 pp.173-204（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 外山政子 1992b「炉からカマドへ 古墳時代の新来の食文化」『助成研究報告』2 pp.87-99 味の素食文化センター
- 外山政子 2018「東日本の竈構造と構成要素再考」『物質文化』98 pp.21-40 物質文化研究会
- 富田一夫 2007「V 調査のまとめ」富田一夫（編）『荒川附遺跡Ⅱ』（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第338集 pp.241-256（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 中沢悟 1986「(2) 竈の廃棄について」中沢悟（編）『大原Ⅱ遺跡・村主遺跡』（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第52集 pp.251-253（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 原智之 2001「竈復元の試み」『土壁』5号 pp.47-60 考古学を楽しむ会
- 文化庁文化財部記念物課（編）2010『発掘調査のてびき一集 落遺跡発掘編一』文化庁文化財部記念物課
- 水口由紀子 1989「いわゆる比企型坏の再検討」『東京考古』7号 pp.119-138 東京考古談話会
- 渡辺一 1990a「第4章 成果と問題点」渡辺一（編）『鳩山窯跡群発掘調査報告書』第2冊 pp.373-390 鳩山窯跡群遺跡調査会
- 渡辺一 1990b「南比企窯跡群の須恵器の年代」『埼玉考古』27号 pp.123-145 埼玉考古学会

A Study of Built-In Earthen Stoves Adopting Ceramic Pots: With Special Reference to the Archaeological Discoveries in Saitama Prefecture, Northern Neighbor of Tokyo

MATSUMOTO Kōtarō

This paper clarifies various aspects of built-in earthen stoves adopting ceramic pots from the late Kofun period (sixth century, A.D.) to the Heian period (794-1185), discovered in the present Saitama Prefecture. Although Japanese archaeology has a long history of research into stoves, there are few studies on the structure and materials of stoves, especially built-in stoves adopting ceramic pots. Therefore, the author has compiled all of their archaeological discoveries in Saitama in order to approach any regional differences, temporal changes, and other aspects.

As a result, the author has found the following:

1. Semi-subterranean residences with built-in earthen stove adopting ceramic pots were spatially skewed toward the northwestern area of the Saitama Prefecture.
2. Built-in earthen stoves adopting ceramic pots appeared in the fifth century, and they reached the peak in the seventh century.
3. The only locally-produced earthenware pots were adopted to the stoves, and no stoneware was used.
4. Ceramic pots were typically adopted to the part close to the fuel holes of the stoves, which suggests that the adoption of the ceramic pots was meant not only to reinforce the stoves but also to increase the opening of air inlet.
5. Semi-subterranean residences with built-in stove adopting ceramic pots were typically larger and more spacious than those without, which suggests that in such large residences foods had to be served to more people, and that the stoves had to be reinforced because of more frequent uses.

KEYWORDS:

Ancient eastern Japan (sixth to eleventh century), structure of earthen stove, earthenware jar.